

メアリ・プラインの『おばあちゃんの日本便り』(1877)

戸田 徹子

Mary Pruyn's *Grandmamma's Letters from Japan* (1877)

TODA Tetsuko

Abstract

Mary Pruyn was a missionary of the Union Missionary Society of the United States. She came to Japan in 1861 and stayed there until 1866. She wrote her grandchildren the letters on Japanese people and their life from there. After returning to the United States, she edited them and published a book named *Grandmamma's Letters from Japan* (1877). The purpose of this book was to raise an awareness among children about the missionary work in Japan and the foreign missionary work in general. Mrs. Pruyn tried to ask for donations for the missionary work by showing the pre-modern features of Japan. While precisely narrating what happened to her mission home for children and girls, she stressed the uncivilized aspects of Japan and denounced the evil nature of ethnic religions there. She considered American society as the norm and made comparison with Japan, however, her explanations sometimes lacked the grounds and rather revealed her ignorance about Japanese society. This paper aims to examine the historical context in which this book was written and have a new look at its ethnocentric aspects.

キーワード：メアリ・プライン 『おばあちゃんの日本便り』 アメリカ女性宣教師 婦人伝道 明治日本
Key words : Mary Pruyn, *Grandmamma's Letters from Japan*, American female missionary, women's work for women, Meiji Japan

はじめに

本稿ではメアリ・パトナム・プライン (Mary Putnum Pruyn, 1820-1884) の著書を取り上げる。これまでに紹介したマーガレット・バラとジュリア・カロザースが宣教師夫人として日本に滞在したのに対し、メアリ・P・プラインは未亡人で米国婦人一致外国伝道協会 (The Woman's Union Missionary Society of America for Heathen Lands) の派遣により来日した。この伝道協会は異教女性にキリスト教を伝道することを目的として、南北戦争前の1861年に組織された超教派団体だった。派遣される宣教師は单身女性に限られ、未亡人と宣教師の娘が優先された。日本

への宣教師派遣はビルマ、インド、中国、そしてトルコに続くものだった。日本伝道開始のきっかけとなったのは、開港された横浜で増加していた欧亜混血児 (ユーラジアン) のために孤児院を作る必要を訴えたジョセフ・バラの呼びかけで、これに応じたのがメアリ・プラインだった。1871年6月、彼女はルイーザ・ピアソン (1832-1899) とジュリア・N・クロスビー (1833-1918) を伴い来日し、3人は横浜に欧亜混血児を収容する施設としてアメリカン・ミッション・ホームを開設した。のちにこれは横浜共立女学校 (現横浜共立女子学園) となる。¹⁾

来日当時、プラインは51歳、ピアソンは39

山梨県立大学 国際政策学部 国際コミュニケーション学科

Department of International Studies and Communications, Faculty of Global Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

歳、クロスビーは38歳であり、この米国婦人一致外国伝道協会のグループはすでに検討した2人の宣教師夫人と比較すると、来日時年齢が一回りも二回りも高い。とりわけプラインは50歳を超えていた。そのせいか、宣教師夫人たちが異文化に接して、一時的現象だったかもしれないが自分の価値観が揺さぶられる経験をしたのに対し、プラインの著作にはそのような経験の痕跡は感じられない。そもそもプラインはバラ夫人が体験したような政治混乱にぶつかりはしなかったし、キリスト教文明の優位性に疑問を持つことはなく、その判断基準もぶれることはなかったようだ。この論文では、1870年代という時代背景に触れ、またほぼ同時期に他のアメリカ女性宣教師によって書かれた日本関係の文献と比較することで、本書の特徴を解明する。

メアリ・プライン

メアリ・プラインは1820年3月31日、父イライシャ・パトナム、母エステルとの間に11番目の末っ子として、ニューヨーク州オルバニーに生まれた。パトナム家は代々スコットランド長老派教会に属しており、父親イライシャは教会の長老を務めていた。²⁾ しかしながら父親が事業に失敗し、一家は貧しく、メアリは十分な学校教育を受けられなかった。1838年8月、彼女が18歳のときに、20歳年上でオルバニー・エクステンジ銀行の頭取であったサミュエル・プラインと結婚した。サミュエルは再婚で、亡くなった先妻との間に5人の子供がいた。それゆえメアリは新婚早々、5人の子供の母親となったのである。その後、自身も8人の子供をもうけたが、このうち成人したのは4人で、さらに南北戦争で息子一人を失った。1862年には夫が亡くなり、メアリは42歳で未亡人となった。

幼いときから宣教師になりたいと願っていたが、それは遠い夢で、メアリの活躍の舞台は所属するオルバニー第二改革派教会であった。彼女はここで日曜学校の教師を務め、聖書研究会を主宰した。さらに活動は社会奉仕へと広がり、女性の更正を助けるハウス・オブ・シェルターを設立し、南北

戦争中は負傷兵のために食料等の生活必需品を調達する奉仕活動のオルバニーのリーダーとして活躍した。来日直前までは、オルバニーのインダストリアル・スクールの責任者だった。これは有志の献金により運営される学校で、貧困家庭の子供たちに勉強を教え、職業訓練を施した。

1869年、プライン宅にジェームズ・バラが滞在する機会があった。プライン家の男性はラトガーズ大学に進学するのが習わしで、メアリの他界した夫サミュエルも同大学の卒業生であり、バラとは同窓だった。またプライン一族の一人R・H・プラインは1861年から65年まで駐日公使を務めており、バラとは何らかのつながりがあったと思われる。この折にバラは横浜で増加していた欧亜混血児の問題について、メアリに助力を頼んだ。欧亜混血児の存在はキリスト教非難の口実にされ、伝道活動の障害となっており、在日宣教師たちは混血児たちを保護し、教育する施設の設置を検討し始めていたところだった。この要請に、メアリは米国婦人一致外国伝道協会の支援を受け自分自身が日本に行くことを決意したのである。そして横浜の地に開設されたのがアメリカン・ミッション・ホーム（亜米利加婦人教授所）であった。

Grandmamma's Letters from Japan (1877)

本書はメアリ・プラインが米国婦人一致外国伝道協会の宣教師として日本に滞在していた1871年から75年までの約5年間に彼女が主として自分の孫たちに書いた29通の手紙を集めて出版したものである。³⁾ プラインにはメアリ、ロバート（バーティ）、アグネス（キティ）というそれぞれ9歳、6歳、4歳の3人の孫がいたが、彼女は多忙で一人ひとりの孫に個々に手紙を書く時間的余裕はなかったようだ。まとめて3人宛てに書いた手紙がほとんどであり、個人に宛てられた場合には他の子供にも見せてあげるように記されていることが多い。なかにはプラインが来日前に関わっていたインダストリアル・スクールの生徒たちにも読ませてやって欲しいと指示されている手紙や、直接、インダストリアル・スクールや日曜学校の子供たちに宛てた手紙も含まれている。いずれの

手紙も回覧が前提で、なかには公的な意味合いの強いものもあった。

これらの手紙を日曜学校やクリスチャン・ホームの子供たちにも読んでもらうために、本書は出版された。19世紀には女性が本を出版することに対してはまだ抵抗が大きく、⁴⁾メアリは友人に勧められて本書を出版することにしたと弁解めいたことを言いながら、この本の出版目的を以下のように語っている。

The letters were generally written hurriedly, and without the faintest idea that other eyes than those to whom they were addressed would ever see them. There is no attempt at order or thoroughness in them, and they were usually suggested by some passing incident. Certainly there is no merit in them, beyond their truthfulness and simplicity. Yet in looking them over, it has been rather urgently suggested by kind and perhaps partial friends that they contain many things that would interest Sabbath-school children, and might serve to give some minds the same impulses that so early stirred my own. (12-13)

子どもたちの間に海外伝道への関心を喚起するために、そして日本の伝道活動の情報を共有するために本書は出版された。この本の主張するところは極めて明白である。それは異教の子供たちを哀れみ、彼らのために祈り、そして献金をして欲しいという訴えである。もちろん子供たちの献金がごく小額であることは織り込み済みであり、むしろ日本伝道に関心を持ってもらうこと、長い目で見て将来、外国伝道のよき理解者として献金者として外国伝道を支援してもらうことが大事だった。

アメリカン・ミッション・ホーム

アメリカン・ミッション・ホームはバラの持ち家(山手48番館)を借りて、欧亜混血児の保護

収容施設としてスタートした。そこは規則正しい生活が営まれる場所であり、キリスト教伝道の場ともなった。朝な夕なに祈りの時がもたれ、讚美歌指導がなされた。しかし周囲の要望に応えるなかで、この施設は多機能化する。女子通学生を受け入れ始め、また求めに応じて男子にも英語を教えた。そしてキリスト禁教下ではあったが、日本人に礼拝の場所を提供した。プラインたちは早くも1年後の1872年には地所を購入し自前の建物を作り、10月には山手212番に移転した。当初は男女の区別なく欧亜混血児を収容していたが、これを機に混血児の受け入れも生徒の受け入れも女子に限定した。さらに外部の子供たちも含め日曜学校が開催されるようになった。プラインによれば、これは日本で最初の日曜学校であった。この間の経緯が子供たちに語られていく。⁵⁾

1870年代前半にあって、しかも50歳を超える年齢で初めて海を渡るには大変な決意が必要だったろうし、滞日中も苦勞が絶えなかったであろう。伝道事業が順調に目に見える形で進展していたとしても、プラインが望郷の念にかられることがあったとしても不思議ではない。手紙の随所で、彼女は孫たちに会えない寂しさを吐露している。しかし他方で、横浜のホームで自分はとても幸福だと断言するのである。

This Home is very dear to me, and I am very happy, as I see around me so many dear children, and sweet, gentle young girls, and know that they are learning those truths and those customs that must surely make them wiser and happier than they could be in their heathen homes; but still my heart goes far over the sea very often, and it is a real comfort when I can sit down and have a little talk with the children there. (142)

もしかしたら異教の家庭で育てられたであろう子供たちがキリスト教の真実と習慣を知って、より賢く、より幸福に生活しているのを身近に見て、

プラインは喜んだ。ホームに収容されている混血児たちについて、日本人の母親の教えに反してキリストへの信心を貫こうとする子供 (34-36) や、異教徒たちの間に放置された子供がミッション・ホームの整った生活環境の中で行儀を身につけ、好んで讃美歌を歌うようになっていく姿 (56-59)、部屋に人が入ってきたのも気づかずに、祈りを捧げる子供 (111-112)、外国人の父親を信仰に導く話 (151-153) など、混血児たちが安心して暮らせるホームに入り、そこでキリスト教に出会い、今度は周囲に影響を与えつつある様子が次から次へと紹介される。

3人の孫たちへの手紙は、ミッション・ホームの活動を実況中継のように逐次報告している。校舎を新築した、ベッドを買った、アメリカの子供たちからのプレゼントでバザーを開催したなど、アメリカン・ホームへの献金が有効に活かされていることが強調され、使途が明瞭になることで子供たちは日本と直接的な繋がりを感じる事ができた。その上で、さらに必要とされるものが指摘され、献金が求められた。なかでもオルバニー・インダストリアル・スクールの先生と生徒に宛てた手紙には、同スクールの生徒たちは貧しい子供たちであるがゆえ、小額であっても工面してもらった献金は尊いと、お礼の気持ち綴られている。(160)

世界各国に散ったプロテスタント宣教師たちはそれぞれの伝道地が有望であることを強調し、自分の伝道地への理解と支援を得ようと競いあったといわれているが、⁶⁾ 本書でも一貫して日本の将来性が高いことが説かれている。山手48番館にホームを開設してわずか4ヶ月に過ぎないというのに、1872年1月7日付けの「オルバニー第一改革派教会日曜学校」宛ての手紙で、プラインは教えを求めて毎日、30人以上の人たちがホームに来るが、同数の人たちを断らざるをえないと次のように述べている。

We have been only four months in this house, and yet in that time it is incredible how many of these poor heathen have

found their way here, and come asking for instruction. One of our ladies has made considerable progress in the language, and is able to teach them; partly in Japanese. More than thirty, men, women, boys, and girls, come here daily, and more than the same number we have been compelled to deny. (137-138)

そして、これらの需要に応じるためには大きな建物が必要であるとプラインは続け、寄付を求めるのである。

... our house is very unsuitable for a large school, and we must have better accommodations to work to advantage; and just here, dear friends, is where I want you to feel is your opportunity to aid in this good cause. To procure the land, and build such a house as we need, will cost a great deal of money; but when we have a suitable dwelling, we can do a vast deal more than is possible now. We have had several applications to take young girls, and even ladies, but were obliged to refuse for the want of room. (38-39)

子供たちからの寄付の多寡に関わらず、自前で土地と建物を用意することは既定路線であったろうが、新校舎建設プロジェクトに子供たちを巻き込むことが重要だった。首尾よく新校舎は1872年10月に完成をみる。

日本を有望視する傾向は、とりわけ1875年1月18日の「アメリカの日曜学校の子供たち」に宛てた手紙 (169-180) において顕著である。日本では若者も年寄りも、貧しい人も金持ちも全ての人々がイエスについて知りたいと切実に願っており、宣教師としては働きがいのある伝道地をまかされて嬉しい。とりわけアメリカン・ホームは女子教育のための日本で最初の学校であり、しかも唯一、授業料無料の女学校である。プラインは

学校の新校舎について説明する。教室は授業に使用されるだけでなく、日本人クリスチャンの礼拝も行われている。女生徒たちは勉強家で、黙っていても自習する。むしろ適度に休息をとるよう促さねばならないほどだ。さらにアメリカ女性の学費援助をうけて学んでいる女学生（オソノ）について、知人に日本の政界の有力者がいて将来、女学校を任せてやろうという励ましをもらったことなどが記されている。勉強好きな女生徒たちと有力者と縁故のある生徒を通し、日本における婦人伝道事業の明るい展望が語られたことになる。

リフレックス理論

外国伝道において成果とみなしうるのは何も伝道地の改宗者数だけではなかった。間接的ながら、アメリカにいる支援者たちが外国伝道支援活動にかかわって、あるいは伝道地からの情報に接して生まれる変化も重視されていた。外国での伝道活動が、逆に母国における支援者たちの信仰を深め、教会活動が活発になることが期待されたのである。それは外国伝道の「反射」(reflex) と呼ばれるものだった。⁷⁾ 子供たちを読者対象とする本書は、とりわけこの「反射」への期待が教育的な意図をもって、おばあちゃんの説教として語られる傾向があった。

休息も取らずに勉学に励む女生徒たち姿はすでに紹介したが、そこには彼女たちを見習いなさいというメッセージがこめられていた。また安息日についてプラインは次のように述べている。

It seems very strange to me here on the Sabbath. There are a few Christians, who have come from other countries, and they keep God's holy day; but none of the native people know anything about His command "Remember the Sabbathday to keep it holy," and most of those who have come from Christian lands are so wicked that they do not care any more for it than the heathen do; and so there is very little difference here between this and any

other day. The people all keep their stores open; they go out with their boats to fish; they work in their fields and gardens, and carry things about to sell, just as they do on other days. (22-23)

安息日であることを知らずに、普段通りに仕事をしている日本人に同情するばかりでなく、安息日に無頓着なキリスト教国出身の横浜在住者を異教者と同様だと批判することで、プラインは彼らを反面教師として聖日遵守の重要性を子どもたちに説いている。これらはいずれも、おばあちゃんのお説教となっている。

日本の子供は素直でおとなしい、とプラインは語る。女性宣教師に限らず、欧米人たちは一様に、日本の子供たちが素直で穏やかな性格で、大事にされていることに気づいた。バラ夫人もカロザース夫人もこれに異論はなかった。子供たちの遊びや行事—お正月、桃の節句、端午の節句、そしてお祭りなどが紹介され、子供ばかりでなく、ときに大人も一緒に遊んでいると不思議そうに記していた。プラインも同様に、日本の子供たちは非常に好ましい性格をしていると語るが、貧しい生活にも関わらずという点が強調されているのがプラインの語りの特徴である。彼女は孫のメアリ宛の手紙で次のように述べる。

The children here are the best-natured and most contented and happy little things I ever saw; though I am sure you would wonder how they could be, if you should see them. If you had to live in such poor little houses, wear such poor, miserable clothes, or perhaps not wear any, as is the case with many of them, you would think it very hard. But they do not seem to mind it, and play about all day without crying or quarrelling at all. I have never seen any of them that even looked as if they felt cross: do you not think little Christian children could learn something

from them in this? I do; and I am sure I could not wish my little folks to be more kind and pleasant with each other than are these heathen children. (23-24)

またホームの子供たちについては、整った顔立ちをしているわけではなく、風変わりに見えるかもしれないが、おとなしくて従順で勉強熱心なので、あまり世話がかからないと誉める。(45) さらに親たちが自由にさせているので、日本の子供たちは静かで素直なのだと指摘する者もいるが、日本の子供たちは生まれつき性格が良いのであり、行儀の悪いアメリカの子供たちにはどうしても躰が要るとプラインは主張し、日本の子供たちを見習うように諭すのである。(82-83)

プラインの手紙は、騒がしく厳しい躰が必要なアメリカの子供たちに、信仰の重要性を説くに際して、日本の子供たちの汚さや貧しさを強調する。劣悪な生活環境にありながらも素直で穏やかな日本の子供たちを賞賛し、物質的にも恵まれているアメリカの子供たちと対比的に描き、キリスト教徒の特権を説くとともに、後者に反省を迫っているのである。この「反射」の子供版とも言うべき教訓を、プラインは次のようにまとめている。

My dear little children, who have such a happy and comfortable home, who have the precious Bible, and know so much of the love of our dear Father in heaven, I hope will pity these poor, ignorant ones, and desire to do something for them. I hope they will rather save their pennies, and put them in the Mission Box, than to spend them all for their own pleasure. That would be only selfish, and make your hearts grow hard and unkind; but if you try to do good, and help others all you can, you will grow more and more like the dear Saviour, and will surely be more happy and beloved by others. I will pray that God will make you all just such

children. (90-91)

異教の恵まれない子供たちのためにマイトボックスに小銭を寄付しなさい。そうすれば心が頑なではなく、幸福で愛される人になれますとプラインは勧める。しかしながら、貧しさと豊かさの対比を描きながら、彼女は期せずして、穏やかで自律的な日本の子供たちと厳しく注意されても騒がしいアメリカの子供たちの対比をも語っているのである。

文明生活の伝道

プラインは日本に来て、おおよそ文明的ではない生活、文明から程遠い生活に遭遇した。人びとはキリストを知らず、それ故よりよい生活を知らず、向上心もないように彼女には見えた。プラインは日本の宗教や風習、生活様式に野蛮を見た。子供たちの話題に限定しても。メアリはミッション・ホームの外には見捨てられたような子供たちがいると指摘する。

But there are some very evil things in their life, and some of them come from that very want of government and care. They are a dirty, sore-eyed, sore-headed, crook-backed, miserable, and diseased-looking set of little creatures, and neither they nor their parents know of any better life. They throng about one every step one goes in the streets, and it takes a great deal of patience and pity to get along with them. (83)

なぜこのように病気の子どもたちが多いのかといえば、"The people are very wicked, and have some very bad practices; and God punishes them by letting them be weak and sickly, and have these horrid diseases, and the poor little children have to suffer for it." (85) と、すなわち神が不道徳な人々を病気がちにし、そのために子供たちも苦しんでいるのだと説明する。処方

箋はキリスト教を信じて、生活改善を図ることであった。

The saddest thing to me is, that they do not know any better life. The parents of these children do not know that if they would live pure, industrious, and proper lives, they would not have these dreadful diseases. They do not know that he idols they pray to cannot make them well, but that our God can do it. (85-86)

プラインが言う "pure, industrious, and proper" とは、アメリカ的な衛生観念、生活規律を意味していたことは言をまたない。ここでは信仰と生活向上が一体化している。

ジュリア・カロザースの『日出づる国』を紹介した際にすでに指摘したが、婦人外国伝道においてはクリスチャン・ホームが重要視され、家の設えから衛生面、そして時間管理に至るまで文明的とみなされる生活様式の伝播が意識されていた。これを反映し、プラインの学校でも欧米のマナーを身につけた日本女性の育成が重視されていた。椅子とテーブルのある暮らし。ナイフとフォークで食事を取る。時間を守り、ときに茶話会を楽しむ。そしてベッドで眠る。このような西洋の習慣をホームの子供たちに教え込み、そして彼女たちの家庭が核となって地域に文明生活が広がっていく構図をプラインは描いていた。食堂をご覧ください、と彼女は次のように説明している。

I would like to have you go into our nice, new dining-room, that I particularly delight in, and see thirty-six girls and children—who only a short while ago were accustomed to sitting upon the floor, and any time, without order or idea of propriety, eating what would satisfy their hunger with chop-sticks or their fingers—now sitting quietly and decorously around the tables, with table-cloths, napkins, knives

and forks, eating their food as properly as any polite and neat American child could. (174-175)

茶話会も素敵な文明生活の一部をなす。新校舎に引っ越して間もない頃、プラインは裏庭で子供たちのために茶話会を開催した。芝生の真ん中に星条旗が掲揚され、子供と女生徒たちはよそいきの着物で集まった。テーブルを花で飾り、ジャムをぬったパン、クラッカー、ケーキ、オレンジ、木の実、そしてキャンディなどのご馳走が並べられる。椅子に座ってテーブルで食べる。このような経験を通して、文明人の生活の素晴らしさを教えたいと、"We want them to know how nice it is to live like civilized people, and so were are trying to show them." (78) とプラインは語る。プラインの思惑通り、少なくともその楽しさは子供たちに伝わったようだ。後の手紙で、子供たちの要望により、茶話会が再度、開かれたことが報告されている。(96-97)

さらにプラインが子供たちを連れて江ノ島に滞在した折のことを、次のように語る。

Our rooms are built apart from the rest of the house, and all around them there is a small veranda. On this and upon the mats in the room, people can step with their shoes on, and I really think there is nothing our children enjoy more than going about here barefooted. Is not that just like all children in hot weather? And do you wonder that these little ones are glad to do just what they always used to do before they came to our house, namely, run about bare-footed, and sleep on the mats? Well, it certainly is nice for a little while in such warm weather; but when we get back to our own home, it will not be good for those whom we hope will become intelligent young ladies, and help to teach their people to live a civilized life, like the

ladies of Christian lands. (212)

驚くべきことにプライン一行は日本民家に土足で上がっている。さらに子供たちは特別に、裸足で歩き回ることが許されたようである。しかしプラインは夏の間のことなので裸足の生活も許容されるが、横浜のホームではそうはいかないと付け加え、子供たちにはキリスト教国のレディのようになって、日本人に対して文明生活を証しする存在になって欲しいと、すなわち文明生活の使徒たる役割を期待していることを付け加えることを忘れなかった。

日本へのまなざし

プラインはときに頑なな一面をのぞかせる。たとえば東京湾を船で渡り木更津を訪ねたとき、浅瀬で船が接岸できず、船頭に背負ってもらい上陸しなければならぬ事態が生じた。プラインはこれを断固拒否。2人の船頭に腕で椅子を作らせ運んでもらおうとして、海に落ちてしまった。彼女は苦笑し、船頭の言う通りにすべきだったと後悔する。(46) また日本の籠は小さすぎるというので、職人の反対を押し切って大振りの籠(グレート・イースタン)を特注した。旅行で使用してみたところ、籠担ぎから嫌がらせを受けている。(117)

幸いにもプラインは学べる人であり、事件を通して教訓を得ていた。とはいえ、このような性格や自国の社会規範への固執は日本社会との接触の仕方に反映してくる。バラ夫人やカロザース夫人と比較して、プラインは異文化に対してあまりオープンではなかったと思われる。白人女性の存在が珍しくて、日本人に凝視されるのは、ほとんど全員が体験したことであつたらう。それをどのように受け止め、記録に残したかをみてみよう。「女唐人」を見たさに集まった日本人を、むしろバラ夫人は観察し返し、子供から老人までをリストアップするが、その筆致は温かかった。⁹⁾ フェリス女学校の創設者メアリ・エディー・キダーは「別に物音がしなくとも、目をあげると必ず障子(紙戸)が細目に開けられ、上から下まで目が一列に並ん

でいるのが見えるのでした。初めはこの好奇心を大変おもしろいと思っていましたが、そのうちどこへ行っても私たちに目が注がれているのをかんじるので非常に苦痛になりました。」と記している。それでもキダーは翌日には、あえて「見世物」になる度量を示した。⁹⁾

プラインはこの種の不愉快さに何度も言及する。しかもそのような場に居合わせる人々が汚らしい身なりであることを指摘する。

First, —and what pained me most, —the greatest crowd of all kinds of people thronged about us as we went through the street in the old town of Kanagawa. It is not very often they see a foreigner, and they are so curious whenever one comes among them. They were so dirty, and had so little clothing on, that I did not like to look at them. Then so many of the children were all covered with sores: O, it was pitiful! (31)

木更津を訪れたときには、「When we came on shore, a crowd of dirty, curious people, including children, gathered about us; and you will not wonder they did so, when I tell you that I was the first white or foreign woman who had ever been in that part of the country.」(64)と述べる。プラインはここでも、集まってくる人たちが貧しく見苦しい身なりであることに言及する。バラ夫人とカロザース夫人の本では日本の貧しさをほとんど感じることはないが、本書ではそれが随所で印象に残る。

一方で、プラインには独断的な見解も多い。日本女性については、お正月と雛祭りには子供だけではなく、大人の女性も人形遊びをする一人形を散歩や訪問に連れだし、新しい衣装を着せ、本物の子供のように優しく取り扱う—と語られる。しかも成人女性が人形をかざしている挿絵つきで、日本の女性は働いていないと以下の解説が加わる。

You may think it funny for women to do this, but you do not know that the women in Japan are not taught to work, or spend their time in any useful way. There are no schools for girls, and so they grow up without learning anything that can fill their minds with good thoughts, or help them to pass their time pleasantly. The poor Japanese women have a very aimless life, and I think playing with dolls is about as harmless a way for them to get pleasure as they could find. (52)

家事をする女性や、田や畑、そして商店で働いている女性の姿をプラインは目にしなかったわけではない。プラインの見聞の範囲が極端に狭かったのか、労働する女性を日本女性に含めなかった一すなわち自分と同様な中産階級のみ注目したのか、あるいは子供たちに分かりやすいように故意にこのような単純な説明にしたのか、これらのいずれかであろう。バラ夫人は日本女性の地位は存外、高いと指摘していた。カロザース夫人は女子が寺子屋に通い、それに加えて装飾的な習い事をする事も知っていた。さらに彼女は教育の中身にまで触れ、ただの暗記ではなく、思考力の養成が必要だと意見を述べていた。ここではプラインの異文化の観察と語りの質が問われることになる。

また子どもについても、プラインは独断的な意見を述べている。ホームの使用人に赤ちゃんが生まれ、プラインの孫の名前をもらって「キティ」と名づけられた。このエピソードが紹介されている箇所、日本人は子どもをほしがらないとプラインは次のように述べる。

... a great many of the Japanese people are very poor, and they do not want any children because it costs money to feed them (not to clothe them, for not many of the poor children wear clothing), and the mother cannot work out in the field, or in any way, so well, if she has a little baby;

and so a great many of people, who are servants, but have wives, will not let any babies come to their house, because they want their wives to help them with their work. (181-182)

欧米人による明治初期の記録において、このような見解はあまり聞かない。その真偽の程は別として、もしアメリカの子供たちがこれを読んだら、生まれてくることを歓迎されない日本の子供を哀れに思い、同情がいつそう深まったであろう。

最後に、1873年5月、プラインが友人の息子であるE・W・クラークを静岡に訪ねたことを書いた手紙の冒頭を紹介しておきたい。

... I came here to see how nice he [Clark] lives, and enjoy the pleasure of traveling in Japan. Well, pleasure it is; though if I could tell you all the discomforts by the way, you would wonder how I could say so; but I am so desirous of seeing the country, and getting acquainted with all the customs and habits of the people, that I am quite willing to bear some inconveniences. (126)

プラインにおいても、地方も見たい、日本の風習や習慣を知りたいという思いは強かった。とはいえ、その仔細を明らかにしていないものの、旅の道中の不愉快さには耐えられないものがあつたと不満を漏らしている。日本には関心があるのだが、ある程度の生活レベルが保障されない限り、それに心が許せないといった、日本に対するアンヴィバレントな感情がここには表れている。

本書において日本は貧しい国と描かれ、日本人ないしは日本文化に対する評価は低い。というよりも、そもそも日本を伝道対象国として捉えている以外に、日本に対する関心があまり無かったのではと思われる。バラ夫人やカロザース夫人の好奇心に満ち溢れた記述と比較して、プラインの手紙では、"heathen" "queer" "weird" といった言

葉の頻度が高い。ある時、音楽について、古寺について説明しようとして、プラインは描写しようがないと説明を放棄するのだが、これは説明不可能だといいながらも言葉を尽くそうとするマーガレットの饒舌とは対照的だ。異文化に "queer" "weird" というレッテルを貼って思考停止する者と、違和感を自分なりに分析しようとする者の、異文化に対する好奇心の開きは大きかった。

おわりに

プラインは在日アメリカ人たちに慕われ、「日本の母」と呼ばれていたという。¹⁰⁾ やさしい女性であったのだろう。また指導力や実務能力があればこそ、アメリカン・ホームを成功に導いた功績も大きかった。しかしながらプラインは健康を損ない、1875年9月に帰国を余儀なくされた。プラインはバラ夫人の来日から約10年後に日本に来た。この10年間に日本は幕末維新を経て政治的安定を回復しつつあった。バラ夫人は安心して生活できる場所すら確保できなかったわけであるが、プライン一行は来日1年後には横浜居留地に地所を確保し、自前の学校を建てることができた。またバラ夫人たちが実質的に成仏寺に隔離され、日本人との接触が禁止されていたのに対し、プラインたちの下には当初から信じられないほど多くの人びとが教えを求めて集まったという。欧化の時代が始まりつつあった。このような時代を背景に、プラインはキリスト教文明への確信をさらに深めたことであろう。ほぼ同時期に来日したカロザース夫人がしきりに苦労話をしているのに対し、本書の場合、子供が読者であるがゆえか、むしろ日本の将来性が強調された。さらに子供たちに誤解が生じるようなことは書けないがゆえ、物事を単純化する傾向があったことは否めない。

とはいえ、そもそもプライン自身が一面的な異教国理解で満足していた嫌いがある。伝道活動行にあたっては、日本社会を理解することが不可欠であろうが、積極的にそれに取り組んだとは思われない。圧倒的な優位にある西洋文明の代表者の一人として、プラインは一方的に観察し、評価を下した。貧しくみすばらしい身なりをしていて

も、穏やかで素直な日本の子供たちの有り様が何に起因するのか。そのような問いかけを、プラインは想起できない。あるいは主人と使用人の区別が判然としない社会を発見するその視点が、ビクトリア時代の身分社会を逆照射する視点にもなりうることに気づかない。さらに指摘すれば、プラインは各民族がそれぞれの創世神話を持つことを知らなかったがゆえに、唯一無比のキリスト教の天地創造物語を拠り所に、日本の創世神話を愚かしいものと否定する。しかしながら、同様な疑問を日本人が聖書の天地創造やキリスト生誕について持つであろうことには考えが及ばないのである。

本書に収められたプラインの手紙はいずれも慈愛に満ちており、プラインが欧亜混血児や日本人の女生徒たちに真に愛情を注いだことは事実であったろう。だが一方で、プラインはまさに時代の産物だった。彼女は日本での布教は簡単だと考えていた。日本にキリスト教を伝道しようとはしたが、日本について深く知ろうとはしなかったようだ。その結果、異教の人びとを気の毒に思い、自らがキリスト教国に生まれたことを感謝せよという読者へのメッセージだけが鮮明に響くことになる。

註

- 1) 同校については次の3点の学校史を参照した。「横浜共立学園120年の歩み」編集委員会編『横浜共立学園120年の歩み』(横浜共立学園、1991年); 同編集委員会編『横浜共立学園の120年』(横浜共立学園、1991年); 「横浜共立学園資料集」編集委員会編『横浜共立学園資料集』(横浜共立学園、2004年)。
- 2) メアリ・プラインの経歴等については、安部純子訳著『ヨコハマの女性宣教師』(EXP、2000年)の「女性宣教師メアリー・P・プライン」(pp.151-212)を参照した。
- 3) Mrs. Mary Pruyn, *Grandmamma's Letters from Japan* (Boston: James H. Earle, Publisher, 1877). 本書からの引用については、()内にページ数を記した。なお本書にはすでに日本語訳がある。前掲の『ヨコハマの女性宣教師』の前半部(pp.19-147)は「グランドママの手紙」と題されて、全訳が試みられている。また小林恵子『日本の幼児につくした宣教師 上巻』(キリスト新聞社、2003年)によれば、同氏もフレーベル館『幼児の教育』第91巻～第93巻

(1992年～1994年)において12回に分けて日本語訳を掲載している。

- 4) Mary S. Schriber, *Writing Home* (Charlottesville and London: University Press of Virginia, 1997), pp. 3, 72-75.
- 5) その後、欧化の時代を迎えて日本社会も欧亜混血児を受け入れるようになったとの判断から、ミッション・ホームは1891年には混血児保護収容の役割を放棄し、その働きを女子教育と女子宗教教育に特化した。『横浜共立学園120年の歩み』、p. 85。
- 6) John K. Fairbank, ed., *The Missionary Enterprise in China and America* (Cambridge and London: Harvard University Press, 1974), p. 62.
- 7) Patricia R. Hill, *The World Their Household* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1985), p. 66.
- 8) Margaret T. Ballagh, *Glimpses of Old Japan 1861-1866* (Tokyo: Methodist Publishing House, 1908), p. 49.
- 9) フェリス女学院編訳、『キダー書簡集』(教文館、1975年)、pp. 29、31。
- 10) 『ヨコハマの女性宣教師』、pp. 200-203。